

KATE Newsletter

関東甲信越英語教育学会 編集委員会

No.120 July 10, 2024



CONTENTS

巻頭言「期待が膨らむ KATE の新年度」(西垣知佳子)	2	
【特集 1 : 各種委員会の活動方針と新役員・委員会一覧】		
学会事務局 活動方針(臼倉美里)	3	
研究大会委員会 活動方針(羽山 恵)	3	
学会誌委員会 活動方針(清水真紀)	4	
研修企画委員会 活動方針(山本昭夫)	4	
研究推進委員会 活動方針(加藤嘉津枝)	5	
編集委員会 活動方針(森 好紳)	5	
新役員・各種委員会一覧	6	
【特集 2 : 関東甲信越英語教育学会 2023 年度春季研修会】		
1. 授業実践報告 (小学校)		
様々な児童に対応した小学校英語の授業づくり (発表・報告者: 瀧沢広人先生)	8	
2. 授業実践報告 (中学校)		
生徒自らが使う英語の授業づくり (発表・報告者: 西村秀之先生)	9	
3. 授業実践報告 (高等学校)		
生徒が安心して「ちょっと」挑戦してみたいくなる授業環境作り — 語彙指導からディベート, 自由英作文の評価まで— (発表・報告者: 片居木純太先生)	10	
4. 講演		
児童・生徒のやる気と自己効力感を高め, 自律的な態度を育む指導と評価 (発表・報告者: 泉恵美子先生)	11	
5. 春季研修会を視聴して その1 (報告者: 檜村祐志)		13
6. 春季研修会を視聴して その2 (報告者: 神村幸蔵)		14
7. 春季研修会を視聴して その3 (報告者: 小室竜也)		15
【研究推進委員会報告】		
第 23 回 英語教育「なんでだろう？」座談会:		
試してみよう! 生成 AI (ChatGPT 等) を活用した英語教育 (講師: 研究推進委員会 臼倉美里・青田庄真/報告者: 伊藤泰子)	16	
関東甲信越英語教育学会日誌	17	
編集後記	18	

巻頭言

「期待が膨らむ KATE の新年度」

関東甲信越英語教育学会会長 西垣知佳子（千葉大学）

2024年4月より、2期目の関東甲信越英語教育学会（KATE）会長を務めさせていただきます。私の任期は2026年3月までとなりますが、2期目の2年間にはKATEの大きなイベントが続きます。コロナ収束後、KATEの通常の活動が戻ってきておりますので、学会員の皆さまにもKATEの学会活動に期待をお寄せいただけたらと思います。

まず、2024年8月17日（土）、18日（日）には都留文科大学で、第48回山梨研究大会が5年ぶりに対面で開催されます。KATE理事長を長年お勤めいただいた浅見道明先生に、大会実行委員長にご就任いただき、力強いリーダーシップのもと、山梨研究大会の準備が日々、着々と進んでいます。しかし、そうは言うものの5年ぶりの対面での大会です。4年以上の空白のために、研究大会の準備では予想外のことが発生し、過去の研究大会運営の経験を思い出しながら一つずつ解決し、さらに新しい時代の大会運営に挑戦しながら、準備を進めているところです。

そして、同時並行的に準備を進めているのが、2025年度に開催される全国英語教育学会（JASELE）の第50回研究大会です。この記念すべき研究大会の担当地区学会として、KATEに順番が回ってきました。大きな節目の記念大会となりますので、こちらも運営委員会では入念に準備を進めているところです。会員の皆さまには、山梨研究大会、そしてJASELE50周年記念大会を楽しみにして、奮ってご参加いただくとともに、日ごろの研究の成果のご発表、最新の研究成果の学びの場として活用していただきたく願っております。特にJASELE50周年記念大会につきましては、今から計画的にご研究を推進していただき、関東で開かれる、50周年の記念すべき大会でご発表ください。

さらに、2026年度のKATE研究大会は、JASELEから1年遅れて、50周年の記念大会となります。こちらもKATEの歴史に残るイベントです。時間をかけて企画を練り、記憶に残る大会とするために、すでに準備が始まっています。

このように期待が膨らむKATEの新年度にあたり、運営委員会の新体制も整いました。イベントが続くKATEです。運営委員会もパワー溢れる先生方にご就任いただきました。まず、副会長ですが、前体制から引き続き加藤茂夫先生（新潟大学）に、そして新たに飯島睦美先生（群馬大学）にご就任いただきました。これまで副会長をお務めいただいた廣森友人先生（明治大学）は、執行部からは退かれますが、引き続きKATEの様々な企画に絶大なるご協力をいただきます。次に理事長は松津英恵先生（東京学芸大学附属竹早中学校）、事務局局長は臼倉美里先生（東京学芸大学）に継続してご担当いただきます。また、KATEの6つの委員会も、本ニューズレターでご報告申し上げますように、それぞれ新組織が固まりました。この盤石な体制のもと、KATEは学会運営に取り組んでまいります。

今年度もどうぞよろしくお願いたします。そして、この夏、KATE第48回山梨研究大会でお会いしましょう！

特集 1 : 各種委員会の活動方針と新役員・委員会一覧

◇各種委員会の活動方針◇

学会事務局 活動方針

事務局長 白倉美里（東京学芸大学）

昨年度に引き続き、関東甲信越英語教育学会の事務局長として、事務局次長の奥村耕一先生（情報経営イノベーション専門職大学）、事務局員の佐藤選先生（東京学芸大学）、マルチメディア担当の宗像孝先生（横浜国立大学）、野田明先生（鎌倉女子大学）とともに、学会運営全般の事務を担当いたします。会員の皆さまの名簿と会費の管理、学会の出版物の発送手配、各種お問い合わせへの対応、学会運営委員会と理事会の事務統括、全国英語教育学会やその他学会との連携など、一つひとつを丁寧に対処してまいります。できるだけ迅速な対応を心掛けてまいります。会員の皆さまにはご不便をおかけしてしまうことがあるかもしれません。お気づきのことがございましたら、事務局までご連絡ください。

また、2年ほど前から本学会のウェブサイトがリニューアルされました (<https://kate.jp.sakura.ne.jp/>)。これに伴いまして、会員の皆さまの個人情報の更新や会費納入状況の確認は、各会員様それぞれがウェブサイトにログインして行っていただけるようになりました。お手数をおかけしてしまう部分もあるかと存じますが、ご理解ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

本学会の会員数は460名（2023年2月末現在）で、地区学会としては中部地区英語教育学会に次いで2番目の規模となります。会員の皆さまが研究大会、春季研修会、月例研究会、座談会・読書会、学会誌投稿など、学会の各種事業にスムーズにご参加いただけるよう、事務局一同、精一杯尽力してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

研究大会委員会 活動方針

研究大会委員会委員長 羽山 恵（獨協大学）

毎年、KATE 研究大会には、多くの会員の皆さまにご参加をいただきありがとうございます。2020年度から感染症対策の一環として実施してきましたオンライン研究大会では、いろいろとご不便をおかけすることもありましたが、皆さまのご協力と温かいご支援、研究・教育実践への熱意に支えられ、4回の開催を無事終えることができました。この場を借りて感謝を申し上げます。

この4年間は、飯島睦美先生（群馬大学）の力強いリーダーシップと細部までへのご配慮のもと、研究大会委員会および学会運営委員会一丸となり、研究大会の企画運営を遂行することができました。このたびは私が委員長職を拝命しましたが、飯島先生の軌跡を大切に受け継ぎ、大会運営に努めてまいります。副委員長の山田敏幸先生（群馬大学）、委員の砂田緑先生（東京学芸大学）、小西瑛子先生（常磐大学）、高波幸代先生（群馬大学）、齋藤雪絵先生（獨協大学）と力を合わせてまいります。

今年度の研究大会は完全対面形式に戻り、8月17日（土）・18日（日）に山梨県の都留文科大学にて開催いたします。長きにわたり本学会に貢献されてこられた浅見道明先生（都留文科大学）を大会実行委員長に迎え、会員の皆さまと直接お目にかかれることを一同楽しみにしております。懇親会も含め、皆さまが楽しく有意義に最新の英語教育事情・研究について学ぶことができるよう、心を込めて準備いたします。また、来年度は全国英語教育学会（JASELE）50周年記念大会をKATEが担当いたします。こちらの準備も既に始めております。

研究大会が皆さまにとって充実したものとなりますよう努めてまいります。一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

学会誌委員会 活動方針

学会誌委員会委員長 清水真紀（群馬大学）

2022年度から委員長を拝命し、今期も引き続き務めさせていただきます。学会誌委員会では、学会誌『KATE Journal』を年に1回発行しています。教育現場で実践や研究に取り組んでいらっしゃる先生方、学位論文執筆中の大学院生にとってはとても身近な学会誌の一つだと思います。実証的研究論文、理論的研究論文、実践報告の3つの種別が設けられています。現在、第38号発刊に向けて査読作業中ですが、投稿数はここ数年、増加の一途をたどり、第38号には35編の論文をご応募いただきました。紙面の都合上、全てを掲載することはできませんが、その分、選りすぐりの論文が集まっています。今年9月頃には冊子をお届けできる予定となっています。そして、昨年度より投稿や査読業務の効率化を進めるべく Editorial Manager 社のオンライン投稿・査読システムを導入しました。会員の皆さまにとってできるだけ使いやすいものになるよう現在システムの修正を重ねていますので、お気づきの点がございましたらご連絡いただけますと幸いです。

今期（2024–2025年度）の委員会の構成は、副委員長には前期に引き続き神白哲史先生（専修大学）、土方裕子先生（筑波大学）、編集委員として石井雄隆先生（千葉大学）、片桐一彦先生（専修大学）、田頭憲二先生（東京家政大学）、物井尚子先生（千葉大学）、そして査読委員として阿川敏恵先生（星薬科大学）、伊佐地恒久先生（岐阜聖徳学園大学）、石塚美佳先生（東京工科大学）、内野駿介先生（北海道教育大学）、粕谷恭子先生（東京学芸大学）、神村幸蔵先生（筑波技術大学）、今野勝幸先生（龍谷大学）、佐藤選先生（東京学芸大学）、高橋有加先生（東京家政大学）、田村岳充先生（宇都宮大学）、名畑目真吾先生（筑波大学）、濱田彰先生（神戸市外国語大学）、半沢茧子先生（東京理科大学）、深澤真先生（琉球大学）、星野由子先生（千葉大学）、山田敏幸先生（群馬大学）の計23名のメンバーになります。英語教育学の各領域でご活躍され、査読や論文執筆に関しても経験豊富な先生方に委員をお願いできることを心強く感じています。より一層の『KATE Journal』の発展のために委員一丸となって尽力してまいりますのでどうぞよろしく願いいたします。

研修企画委員会 活動方針

研修企画委員会委員長 山本昭夫（学習院高等科）

本年度から研修企画委員会委員長を担当させていただきます。研修企画委員会では、小中高大の先生方による研究・実践発表を行っていただくため、これまで二ヶ月に一度程度の月例研究会、年度末の春季研修会を開催しておりました。会員の皆さまにとって研究と実践をつなぐ場、そして、お互いの親睦を深める場となるよう、今年度もより質の高い月例研究会等の企画・運営を目指してまいります。会員の皆さまのご参加を委員一同、心よりお待ちしております。

今年度は11名の委員でより充実した研修の企画・運営を目指し活動してまいります。副委員長は、関口友子先生（東京都墨田区立第三寺島小学校）と前年度まで委員長だった物井真一先生（筑波大学附属高等学校）がご担当になります。委員には、引き続き石井潤先生（文教大学附属高等学校）、川口純先生（順天中学校・高等学校）、塩飽りさ先生（筑波大学附属高等学校）、根岸加奈先生（軽井沢風越学園）、福田スティーブ利久先生（文教大学）、若松直樹先生（桐光学園中学校・高等学校）、渡邊聡大先生（海城中学高等学校）がご担当になります。また、泉澤誠先生（武蔵野中学高等学校）を新たな委員としてお迎えしました。今年度も研修企画委員会をどうぞよろしく願いいたします。

研究推進委員会 活動方針

研究推進委員会委員長 加藤嘉津枝（日本大学）

研究推進委員会は、英語教育に従事している先生方や教員を目指している学生の皆さま、その他英語教育に携わっている方々に、英語教育研究を、堅いものではなくもっと身近なものとして感じていただくことを目指して活動を進めております。主な活動内容は「英語教育『なんでだろう？』座談会」と「出張！英語教育なんでも読書会」です。研究推進委員会の活動を通して、皆さまが英語教育研究に足を踏み入れるお手伝い、きっかけ作りができればと願っております。

メンバーは、副委員長の高木哲也先生（筑波大学附属高等学校・筑波大学大学院生）と委員の青田庄真先生（茨城大学）、伊藤泰子先生（神田外語大学）、井戸聖宏先生（弘前東高等学校）、臼倉美里先生（東京学芸大学）、大關晋先生（日本大学第二中学校・高等学校）、後上雅士先生（早稲田中学校・高等学校）、駒形知彦先生（学習院中等科）、佐藤選先生（東京学芸大学）、鈴木祐一先生（神奈川大学）、砂田緑先生（東京学芸大学）、田中広宣先生（東京大学）、田辺博史先生（青山学院高等部）、冨水美佳先生（昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校）、松津英恵先生（東京学芸大学附属竹早中学校）、矢部隆宜先生（目白研心中学校・高等学校）の17名です。

編集委員会 活動方針

編集委員会委員長 森 好紳（白鷗大学）

編集委員会では、英語教育の研究・授業実践に関して、会員の皆さまにとって有益な情報をお届けすべく、年次研究大会の『発表要綱』や『KATE Newsletter』を発行しております。『発表要綱』の制作に関し、2024年度の山梨研究大会から対面開催に復帰しますが、引き続きPDF版を配信いたします。ただ、研究大会の会場を回られる上で、お手元に紙の資料があると分かりやすいかと思っておりますので、発表一覧や会場図などは印刷版を頒布させていただく予定です。

『KATE Newsletter』は例年通り、7月（夏号）と3月（春号）の年2回の発行を予定しています。夏号では春季研修会、春号では年次研究大会を特集するとともに、特別講演会、月例会、座談会、読書会など、本学会が実施している各種企画の様子をお知らせいたします。登壇者・参加者の皆さまには取材やご寄稿をお願いしておりますが、ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。KATE Newsletterは会員の皆さまにメーリングリストでお届けするとともに、バックナンバーを学会ウェブサイトにてアーカイブ化しており、一般の方々にも皆さまの教育・研究や本学会の取り組みを発信しております。

今年度は、副委員長の田中菜採先生（日本大学）、委員の青木重憲先生（芝浦工業大学柏中学高等学校）、神村幸蔵先生（筑波技術大学）、小室竜也先生（東北大学 特別研究員）、佐々木大和先生（帝京大学）、佐藤連理先生（茨城県立水戸商業高等学校）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、細田雅也先生（成城大学）、明治大学大学院生の榎村祐志さん、筑波大学大学院生の埴千賀子さん・福光将仁さん・水書亮さんと合計13名の委員体制で活動を行ってまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

◇新役員・各種委員会一覧◇

会 長 西垣知佳子

副会長 加藤茂夫 飯島睦美

理事長 松津英恵

理事

(都県名：50音順)

[茨 城] 齋藤英敏	[神奈川] 工藤洋路 田邊祐司 西村秀之	[群 馬] 津久井貴之	[埼 玉] 赤塚祐哉	[千 葉] 大井恭子 酒井志延
[東 京] 片山七三雄 金枝岳晴 中村優治 高田智子	[栃 木] 田村岳充	[長 野] 赤地憲一 桐井 誠	[新 潟] 松沢伸二	[山 梨] 三枝幸一 浅見道明

*上記に加えて、会長委嘱により各委員会委員長・副委員長・事務局長・事務局次長が理事を兼任する。
氏名は50音順です。

事務局

事務局長 白倉美里 事務局次長 奥村耕一
事務局員 佐藤 選 マルチメディア担当 野田 明 宗像 孝

研究大会委員会

委員長 羽山 恵 副委員長 山田敏幸
委員 小西瑛子 齋藤雪絵 砂田 緑 高波幸代

学会誌委員会

委員長 清水真紀 副委員長 神白哲史 土方裕子
編集委員 石井雄隆 片桐一彦 田頭憲二 物井尚子
査読委員 阿川敏恵 伊佐地恒久 石塚美佳 内野駿介 粕谷恭子 神村幸蔵
今野勝幸 佐藤 選 高橋有加 田村岳充 名畑目真吾 濱田 彰
半沢瑠子 深澤 真 星野由子 山田敏幸

研修企画委員会

委員長 山本昭夫 副委員長 関口友子 物井真一
委員 石井 潤 泉澤 誠 川口 純 塩飽りさ 根岸加奈
福田スティーブ利久 若松直樹 渡邊聡大

研究推進委員会

委員長	加藤嘉津枝	副委員長	高木哲也			
委員	青田庄真	井戸聖宏	伊藤泰子	白倉美里	大關 晋	後上雅士
	駒形知彦	佐藤 選	鈴木祐一	砂田 緑	田中広宣	田辺博史
	富水美佳	松津英恵	矢部隆宜			

編集委員会

委員長	森 好紳	副委員長	田中菜採			
委員	青木重憲	櫻村祐志	神村幸蔵	小室竜也	佐々木大和	佐藤連理
	鈴木健太郎	埴千賀子	福光将仁	細田雅也	水書 亮	

運営委員会

*運営委員会は会則第 11 条に則り、会長・副会長・理事長・事務局長・事務局次長・各委員会委員長・副委員長から構成されている。

運営委員	飯島睦美	白倉美里	奥村耕一	加藤嘉津枝	加藤茂夫	神白哲史
	清水真紀	関口友子	高木哲也	田中菜採	西垣知佳子	羽山 恵
	土方裕子	松津英恵	物井真一	森 好紳	山田敏幸	山本昭夫

会計監査 杉田千香子 廣瀬浩二

参与 佐藤文俊

KATE 所属の全国英語教育学会 (JASELE) 役員

副会長 斉田智里 (2024 年 4 月—2026 年 3 月)

理事 西垣知佳子 (2024 年 4 月—2026 年 3 月)

理事 加藤茂夫 (2024 年 4 月—2026 年 3 月)

幹事 白倉美里 (2024 年 4 月—2026 年 3 月)

紀要編集委員 清水真紀 神白哲史 土方裕子

紀要査読委員 磯 達夫 伊藤泰子 大野真澄 神白哲史

加藤茂夫 工藤洋路 古賀 功 嶋田和成

清水真紀 濱田 彰 土方裕子 星野由子

特集 2 : 関東甲信越英語教育学会 2023 年度春季研修会

◇授業実践・研究報告を行って◇

1. 授業実践報告 (小学校)

題目「様々な児童に対応した小学校英語の授業づくり」

発表・報告者：瀧沢広人 (岐阜大学)

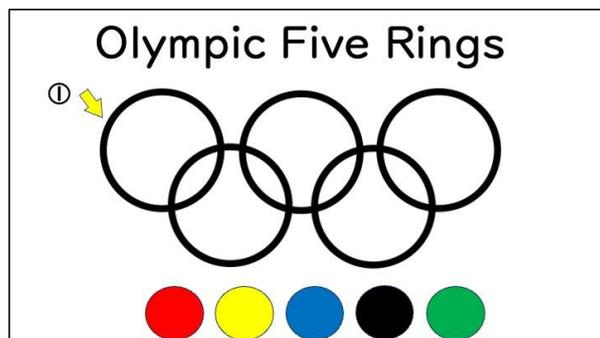
私自身、中学校・小学校の勤務の際、授業で一番、力を入れてきたことが、児童・生徒にやる気を持たせることでした。その根底には、全員参加の授業があります。全員を参加させるためには、授業は楽しくなければいけません。そのため、努力は、惜しまず、授業づくりを行ってきました。

ワークショップでは、やる気を持たせるための方策として、次の6点を示しました。

① 単調な学習に変化を付ける。② 「あれ？」と思わせる。③ 児童の持つ力の少し上を提示する。④ 知っているか知らないかのぎりぎりのところを尋ねる。⑤ 身近なところから話材を探す。⑥ すべてを見せないで一部を隠して見せる。

同じ活動の連続は飽きるものです。かといって、技能は繰り返さないと力がつきません。そこで、同じ活動に変化を付け、児童のやる気を維持します。また、児童の持っている学力の少し上を示したり、知っているか知らないかのぎりぎりのところを尋ねたりしながら、「あれ？」と思わせます。英語学力と別のところで勝負させ、英語の苦手な子が正解し、英語の得意な子が不正解になるなどの逆転現象を授業で生むようにします。事例では、五輪マークを示しました。“What color is No. 1?” と言って、左上の輪の色を尋ねます。これは英語学力で勝負していません。英語力があるかないかではなく、英語力の外で勝負しています。だからこそ、全員が参加できる授業となります。英語のできる子だ

けが活躍する授業は、私の求めるところではありません。英語の苦手な子が、どれだけ授業に参加するかが大事だと考えます。同時に、「あれども見えず」を体験してもらいました。ヒトは「気づか」ないと、「理解」に進まないことを確認していきました。



その後、「児童は何に興味を見せるのか」「授業における3つの楽しさ」「楽しい活動を行う」「遊び心をもつ」「言語活動 vs 英語ゲーム」等々の話を絡めました。

児童を一瞬!やる気にさせるには? ①

児童は、現状に満足しない。
何か楽しいものを待ち受けている。

- ① 「あれ？」と思わせる。=意外性のある授業
- ② 知っていそうで知らないことを提示する。
=児童の力の少し上を与える。
=ぎりぎりのところを示す。

やる気について考える -第2章-

では?人はどんな時に行動を起こすのか?

N: しかしながら、授業においては、
楽しいが先行すべき。

テストがあるから。
叱られるから。
できないと恥ずかしいから。

外発的な動機

最後に、散髪屋での話をしました。私の行きつけの散髪屋は、親子でやっています。私は息子さんの方に髪を切ってもらおうのですが、ある時、

「先生も大変だよな。やる気のない生徒も教えずなくちゃいけないんだから」と話してきました。とっさに(そうですね)と言おうと思った瞬間、お父さんの方が、すかさず、「いや～、教師の仕事は、やる気のない生徒をやる気にさせるのが仕事なんだよ」という言葉を聞き、年輩の方の思いや考えって偉大だなあと、やる気についての新たな学びとなりました。それからというもの、生徒のやる気の無さを嘆いたことはありません。やる気にさせるのが教師の仕事。やる気にさせられなかったら、教師の技量はそこまでということになります。

今回は、1時間、オンラインということで、やや一方的な話となってしまいましたが、貴重な機会を与えていただきました。ありがとうございました。小学校は新教科書となりましたので、様々な面で勉強していきたいと思います。

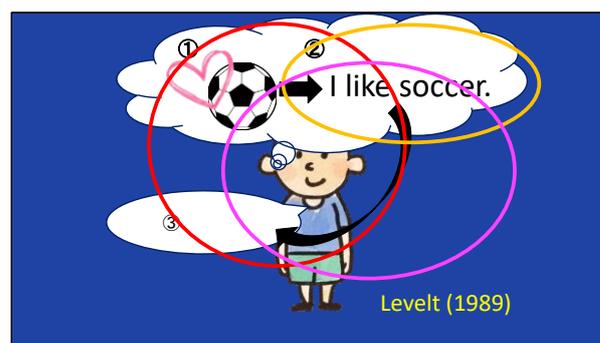
2. 授業実践報告 (中学校)

題目「生徒自らが使う英語の授業づくり」

発表・報告者：西村秀之 (玉川大学)

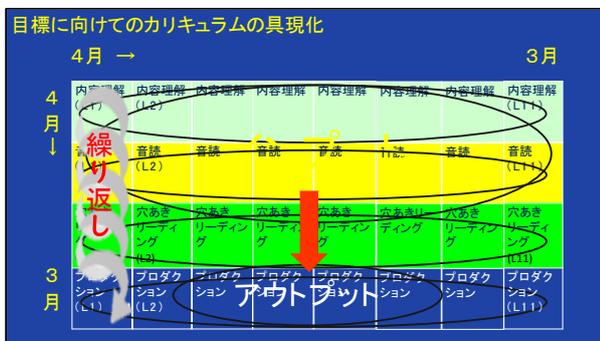
日々私たち教員は授業改善に取り組んでいるが、昨今様々な英語教育に関するアンケートなどを目にするると、児童生徒の英語嫌いであったり、英語を苦手としたりする声が増えてきているのが気になるところである。全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査によると、「英語の勉強は好きですか」に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答が平成 31 年度は 56.3%、令和 3 年度は 56.9%だったのに対し、令和 5 年度は 52.3%となっている(文部科学省, 2023)。回答している生徒が異なるため英語(学習)嫌いが一概に増えてきているとは言えないが、注視していかなければならないのではないかと考える。現在、将来主に小学校の教員を目指す教育学部の学生の授業を担当しているが、アンケートなどの回答を見ていると同様の傾向が見られる。また、その主な理由として「単語が

覚えられない」「文法や英単語を覚えるのが大変」などが挙げられている。もちろん言葉を覚えていくことは必要となってくるが、英語の授業で扱うのは現行の指導要領では「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」であり、それらの領域の活動を通じて児童生徒の英語の力を育てていきたいところである。大学での授業は「外国語(英語)指導法」など教職に関わる科目ではあるが、授業冒頭に英語を使う活動を取り入れたところ、最後のアンケートでは「英語に対する印象が変わった」「書いて色々覚えるより楽しかった」などの回答が多く見受けられた。英語を児童生徒が活用しながら力を育むことは大事ではないか、ということ改めて感じさせられている。



活用を踏まえた授業改善を考える際、教員が更に視点を持ち考えていくことが大切だと考える。例えば、「話す力」を育みたいとした時に、「話す」プロセスは、シンプルに表すと伝えたメッセージがあり、それを表現化し、そこに音声に乗せ伝える、ということが言われている(Levelt, 1989)。そのことを踏まえて授業改善を考えるとどのようなことが考えられるであろうか。プロセス全てが含まれた活動、表現や語彙を残すような活動、表現や語彙を音声化する活動などが考えられるのではないだろうか。また、表現や語彙を残す際に、第二言語習得のプロセスでインプットしたことからインテイクには気づきが必要だと言われている(Schmidt, 1990)。気づきが起こるためには授業改善としてどのようにしたら良いか、などポイントを押さ

え生徒を育むために授業改善を共に考えていきたいところである。(当日は生徒自らが使う授業の具体例として「5ラウンドシステム」のカリキュラム・授業を紹介した)



引用文献

国立教育政策研究所 (2023). 「令和5年度 全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」. 入手先:

https://www.nier.go.jp/23chousakekkahouku/report/data/23qn_k.pdf

(最終アクセス日 2024年4月23日)

Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. MIT Press.

Schmidt, R. W. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11(2), 129–158.

3. 授業実践報告 (高等学校)

題目『生徒が安心して「ちょっと」挑戦してみたい授業環境作り—語彙指導からディベート, 自由英作文の評価まで—』

発表・報告者: 片居木純太

(栄光学園中学高等学校)

生徒が授業中に失敗や恥をかく不安を感じることなく、自らの能力を最大限伸ばすことができる授業環境を作るために、私は3つのことを実践しています。まず、(1) 学習者の情緒的および能力的変容を引き起こすために「困難だが達成可能な」タスクによる成功体験を与えること。歯応えのあるタスクを繰り返し成功させることで生徒は自己効力感を得ることができます。「もっとできるようになりたい」という意欲が芽生えたと、(2) 「学習者自身が自らの学習目標を設定する」ようになります。また、授業を(3) 「内容中心」にすることで、言語形式に過剰な意識を向けることによる不安を拭うことができます。

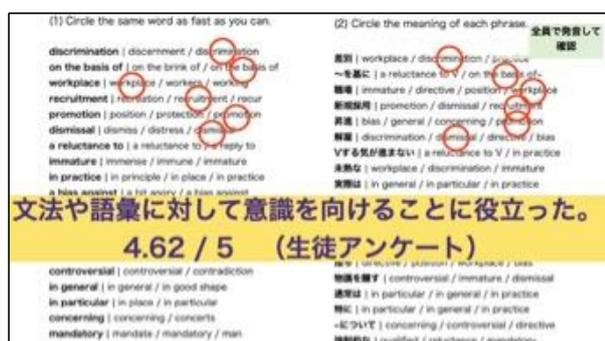
これらの考え方を自由英作文指導に当てはめると、指導の初期段階から文法や語彙の正確性に注目させるのではなく、まずは意味内容に意識を向けさせ、他者と協同しながら段階的に正確な自由英作文を書く技術を教えることが重要となります。

上記を踏まえた私の授業実践をご紹介します。私の授業は、6つの活動で1つの単元を構成しています。

1つ目の活動は、自力で時間内(10分)に規定語数(100語)書くことを目標にした自由英作文です。トピックや関連語彙を知らないため、ほとんどの生徒は満足に書くことができませんが、今後の授業で何を学ぶ必要があるかを自覚することができます。

2つ目の活動は、英作文トピックに関連する英文の読解と聴解です。両活動において避けられないのが語彙指導ですが、短時間で習熟度に関わらず「困難だが達成可能な語彙指導」とし

て、“Word recognition” というタスクを行なっています。単語を構成する「つづり」「意味」「発音」の3要素の認知処理を素早く行えることが、読解と聴解のボトムアップ処理に必要不可欠です。そのために、なるべく素早く錯乱肢の中から同じスペルに丸をつけるタスク、日本語訳に該当する英単語に丸をつけるタスク、そして最後に教師に続いて発音練習をさせています。読解は“Jigsaw reading”の手法を用いています。4人グループで別々の4つの英文を担当し、同じ文の担当者同士で内容確認を行なった後、元のグループに戻り担当の文内容を説明する活動です。また聴解では、教師が英語でトピックに関連するスピーチをすることによって、使用する語彙レベルや発音速度を適切にコントロールすることができる“Teacher talk”を活用しています。



3つ目の活動は、ディベートの立論原稿を「主張」「理由」「例」「主張」の各要素に分け、複数の生徒で各要素を書き上げる“Round-robin writing”です。生徒は「主張」を書いた後、原稿を後ろの生徒に渡し、前の生徒から原稿を受け取り、その原稿の続きを書く、というタスクです。論理的な英語を書くのが苦手でも、生徒同士で助け合うため、原稿を完成させることができます。

4つ目の活動では、以前別トピックで書いた英作文を添削したものを用います。また、生徒の中で高頻出だった言語的誤りを含めた誤文訂正タスクを作成し、4人グループで協同して解きます。トピックが異なっても、生徒たち

が間違える文法や語法は似たものが多いです。グループで「なぜ間違えているのか(否定証拠)」を考えさせることで間違いやすい言語形式への意識を高める工夫をしています。

5つ目の活動は、1対1のディベートです。ランダムで肯定否定を決めた後、立論を7分間で書いてもらいます。ディベートそのものが難しい言語活動ですが、全ての生徒が“Chain writing”で立論執筆を経験しているため、誰にとっても「達成可能な」タスクになっています。立論執筆後はお互い1分間でスピーチをし、反論と反駁(反論に対する反論)を立論と同様(執筆7分、スピーチ1分)で行います。

最後に自由英作文です。ディベート活動が終わった直後に書かせることで、生徒は10分間ペンを止めることなく書き続けます。その原稿は、最初に書いた原稿よりも豊かな論理、内容、表現になっており、生徒は自らの成長を感じることができます。このような成功体験を繰り返すことにより、自ら学習目標を設定し、高い意欲を持って学習する素地を生徒自らが作り上げるのだと思います。

4. 講演

題目「児童・生徒のやる気と自己効力感を高め、自律的な態度を育む指導と評価」
発表・報告者：泉恵美子（関西学院大学）

講演でお話させていただいた主な内容を、簡単に振り返りたいと存じます。

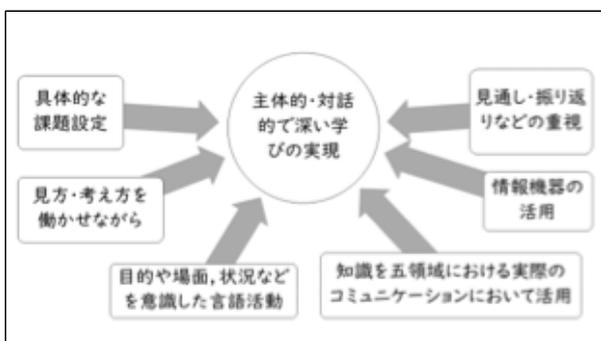
1. はじめに：今求められている力

VUCA (Volatility [変動性], Uncertainty [不確実性], Complexity [複雑性], Ambiguity [曖昧性])の時代において、言語スキルのみならず、問題解決力やメタ認知などの思考力、自律的に活動するなど実践力が問われています。さらに、OECDのEducation2030プロジェクトでは、個人及び社会がよりよく生きるウェルビーイングに向かうための学習枠組みが提示され、知識、

スキル、態度・価値、変革を起こすコンピテンシーが挙げられています。学習者が主体となり、周囲の人々や他者との関わりの中で、行動を起こし、予期・行動・省察を繰り返し自分たちが生きる世界や共同体を他者と共に作り替えていくエージェンシーとしての主体的・対話的で深い学びが必要になります。

2. 学習指導要領で求められている資質・能力と見方・考え方、「主体的・対話的で深い学び」とは

学習指導要領では3つの資質・能力の育成が求められており、特に目的や場面・状況を与えた言語活動や各教科の見方・考え方を踏まえた思考の枠組みをいかに設定するかが重要な鍵となります。知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図りたいものです。また、1人1台端末が入ったことで、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、学習者の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行い、資質・能力を育成することが目指されています。講演では、小中高の学習指導要領の目標を比較しつつ、主体的な学び、自律した学習とはどのようなものかについてまとめました（下図参照）。



3. やる気・動機づけ、自己効力感、自律的な学びに関連した理論

本題に関連した理論を取り上げ、外国語学習

への高いエンゲージメントが内発的動機づけにつながったり、有能感、関係性、自律性を育成したりすることが重要であるといった SLA 研究からの示唆を述べました。また、メタ認知と動機づけを統合した自己調整学習循環の段階モデルを示し、授業づくりのポイントやストラテジー指導の実践を紹介しました。

やる気と自己効力感を高め、自律的な態度の育成をめざす指導

- (1) テーマや題材：児童生徒が興味関心を持てるものに（自己関連性）
- (2) 学習者中心、学習中に「主体的、対話的で深い学び」を誘うコンテンツを考え、明確な課題と各自で「問い」（なぜ）を持たせる。探求や挑戦しがいのある内容に（課題解決学習）
- (3) 言語活動やコミュニケーション活動で成功体験（できた、わかった）を積み重ね、有能感や自己肯定感を高める。＊タスクや活動の設計が重要
- (4) 「学び方」の指導：リスニング、リーディング、読書学習、コミュニケーションストラテジーや評書指導、発音指導など（自律性）
- (5) メタ認知ストラテジーを育成：明示的にストラテジーを指導し試行⇒自分でどれを使うかを計画・選択させ使用⇒上手いだったか/なかったか、それはなぜか理由を振り返り評価（発話を録音・録画し、個人、ペアで振り返ることも可）⇒次の目標を立てる。
- (6) 自己調整学習のために最終ゴールを示し、到達目標を確認し、そこに至る学習の計画、実施、振り返りの過程を大切に、自己の学びを可視化・言語化させ、学びのシートなどを用いて行動指標を示しつつ取り組ませる。日頃の授業で意義を語り、成果を実感させる
- (7) 感性や五感、多量知識、身体性、情動を大切に英語学習を行う。感動や発見を伴う体験、認知と情動の両面をサポートする環境
- (8) タブレットやICTを活用して個別最適化と協働学習を創造する：個に応じた学び方を支援。
- (9) 単元や学期を超えて自律的学習者を育成する長期的な視点を持つ。（回帰性の確立）
- (10) 教員の役割と発想の転換：デザイナー、ファシリテーター、コーディネーター、ナビゲーター、コラボレーター、対話者などの役割に、児童生徒の思考が高まるのを待つ姿勢が大切。

4. 学習評価について：小学校での優れた授業実践

中高大の評価問題や入試問題例を示し、どのような能力が求められているのかについて触れた後、3観点を踏まえつつ、有能感や自己効力感を育て、自己調整学習ができる自律した学習者に導く活動設計と評価の在り方について、Can-Do 評価を用いた振り返りシートやルーブリックを用いたパフォーマンス評価を紹介しました。また、評価活動に学習者を巻き込み、彼らが主体となり、自己の学習に責任と意欲をもって粘り強く取り組む習慣を身に付けさせる優れた実践例をご紹介しました。教員は児童の無限の可能性を信じて伴走しつつ、山登り型バックワードデザインを用いたためあてやルーブリックを共創し、タブレットや思考ツールなども活用して深く思考させ、自由進度学習を用いて自己調整学習を推進し、eポートフォリオにも取り組まれています。

5. 自律した学習者を育むために

教師や仲間の温かい支援と励ましがあがり、互恵の関係の中で協働的に学べ、自身が受容されていると感じる心地よい空間や、学びの共同体

を支える環境(場)が確保されていること、授業中に楽しい笑いがこぼれたり、真剣なまなざしで課題に没頭する瞬間の積み重ねや、隣人に気軽に尋ねたり共に悩んだり考えたりできる学習集団づくり、他教科や学校行事等を通した非認知能力の育成も欠かせないと思います。指導者ご自身が、英語教育の目的を再度確認し、言葉とコミュニケーションを大切にした授業を通してコンピテンシー、態度、人間性、人格の形成をめざしたいものです。

この度は、大変貴重な機会をお与えいただきまして、深く感謝申し上げます。

◇春季研修会を視聴して◇

5. 春季研修会を視聴して その1

報告者：櫻村祐志(明治大学大学院)

今回の春季研修会は、「児童・生徒のやる気を高め、自身を持たせる授業と評価」がテーマとなっております。様々な学校種において、英語学習者のやる気を高めるために教師ができることは異なり、とても悩ましく感じることの1つだと感じます。そのような悩みに対して、4名の先生方が共有してくださった多岐にわたる具体的なアプローチをもとに、様々な実践を1度に学ぶことができる研修会にこの度参加させていただき、大変有意義な機会となりました。

外国語(特に、英語)を学ぶ初期段階にあたる小中学生にとって、外国語に対して抱く第一印象はその後の学習に大きく影響を与えると感じます。そのため、英語学習に対する肯定的印象を持ってもらえるよう、多様な工夫が教師に求められます。特に、中学校の実践報告をしてくださった玉川大学の西村先生からは、学習者に馴染みのあることを活動に組み込み、繰り返し触れる時間を取ることで動機づける工夫について学ぶことができました。小学生に対しては「気づき」を与えること、中学生に対してはタスク

を「繰り返し」行うこと等を通して、英語は学習者自身に関係ないものではなく日常の生活の中で身近にあるものであるという認識を持ってもらうことが重要であると感じました。また、中学校の英語授業では、小学校で学習した内容をもとに4技能に関する能力を高めていく必要があります。その際、新出テーマを用いるのではなく、5ラウンドシステムを用いて何度も既存テーマを扱いつつ、新たなスキルを身につけてもらうように工夫するという実践は、今後の授業実践に活かすことができるものであり、大変勉強になりました。

高等学校での英語授業は、小学校及び中学校の授業内容をもとに、より細かい知識やスキルが求められるものになります。さらに、習得すべき事項が増える段階であるため、英語に対する苦手意識を持つ学習者が少なくないと感じます。そのため、学習者個人の状況を踏まえながら授業実践をすることが求められます。高等学校の実践報告をしてくださった栄光学園中学高等学校の片居木先生からは、理論的観点を取り入れた授業設計についてご紹介いただきました。自由英作文などの活動中、どの学習者にはどの程度のサポートが必要なのかを考える上での「足場かけ」に関する情報を具体例とともに提供していただき、実際の現場をイメージしながらお聞きすることができました。学習者一人ひとりを念頭に置き、心理的安全性を高めるアプローチを新たに学ばせていただきました。

以上の小学校・中学校・高等学校での英語授業における実践に加えて、学習指導要領の観点から捉えることができるやる気向上のための指導や評価について、関西学院大学の泉先生よりご講演いただきました。実際の授業内で学習者のやる気を高める際、どのような観点に基づきながら評価することが重要なのか、学習指導要領内で用いられている具体的な記述や泉先生ご自身の実践例に基づきながらご紹介いただきました。指導と評価は一貫している必要があるため、参照可能な評価基準にはどのようなものが

あるのかを把握しておくことが重要になります。これまで泉先生が取り組まれてきた Can-Do 評価やパフォーマンス評価の具体例は、大変示唆に富むものでした。

終わりに、年度末にもかかわらず、ご登壇いただきました 4 名の先生方にお礼申し上げます。英語授業における具体的な場面を踏まえながら、やる気を高めるためのアプローチをご教示いただき、大変勉強になりました。先生方からいただいた豊富な示唆をもとに、「英語学習者のやる気を高め、自信を持たせることができるようにするために私は何ができるか」を考え、これからの実践及び日々の研究活動に邁進してまいります。

6. 春季研修会を視聴して その2

報告者：神村幸蔵（筑波技術大学）

今回は、春季研修会の参会記として、個人的に特に印象に残った小学校の部についての感想を執筆します。ご講演くださったのは、埼玉県内の学校で英語・外国語学習の指導をされ、現在は岐阜大学で教鞭をとられている瀧沢広人先生でした。その内容は、日ごろから子どもたちの英語・外国語活動に対するやる気を高めるのに苦心している先生にとって非常に有益なものでした。以下に、その内容をかいつまんで共有いたします。

冒頭は、英語による瀧沢先生の small talk に始まり、先生が授業で実践されていた導入、いわゆる「つかみ」の実演がありました。実演では児童にとって身近で馴染みのある野菜や動物を示しながら、「水に浮く野菜と沈む野菜の違いは何？」や「イルカの鼻や耳はどこにあるのか？」などを問いかけ「あれ？と思わせる」、「知っているようで知らないことを提示する」という児童のやる気を出させる一連の過程をお示しいただきました。このような活動を通して英語が得意な子だけでなく苦手な子にも活躍の機会を与え、

児童全員の参加が促される状況（瀧沢先生は「逆転現象」と呼ばれていました）を作っていくことは、学習者の情意面に配慮しつつやる気を高める上で意識したいことだと感じました。

後半では、第二言語習得の理論的な説明と、それを踏まえた知識・技能を身につけられる言語活動の例の紹介がありました。瀧沢先生によると、第二言語の習得には最初のインプットから最後のアウトプットまでの間に「気づき」→「理解」→「内在化」→「統合」という一連の過程があります。しかし、瀧沢先生からは、習得のかなめである「統合」までを 1 つの授業で終えるのは難しいため、今回の授業の帯活動で児童に取り組ませるのがよいというお話がありました。その後、児童のやる気を高める言語活動の例を数点お示しいただきました。例えば、帯活動で行うゲームの例として、HK といったイニシャルを見せて誰の（何の）イニシャルなのかを当てる（例：ハロー・キティ）といった活動を見せていただきました。他にも、表現の導入のために行うスキットの例では、いきなり児童に話しかけず、ターゲットとなる表現を示して大体の意味を理解させることや、教師と ALT の例示で意味のある場面を作り出しそこでターゲットの表現を提示する、といった心がけるべき点のご説明がありました。

上述の活動以外にも児童のやる気を高める活動やアイデアのご説明がたくさんあり、1 時間のご発表が短く感じられました。小学校で指導されている先生方以外にも多くの気づきや学びを得られる時間だったのではないのでしょうか。最後に、ご発表くださり、またその後の私からの質問にも丁寧にご回答くださった瀧沢広人先生にこの場を借りて感謝の意を申し上げます。どうもありがとうございました。

7. 春季研修会を視聴して その3

報告者：小室竜也（東北大学）

春季研修会に参加し、とても心に残った中学校の部について感想を執筆します。発表者の玉川大学 西村秀之先生は、小学校の先生を目指す大学生の教員養成の実践をしておられます。受講生の中には英語は得意ではない、むしろ「英語が苦手」と感じている大学生が多いとのこと。西村先生は、小学校で英語を教えるにはスモールトークを通して、学習者自身が英語を使うことが極めて重要であることを強調されていました。この点において、英語の授業でよく使われる表現であるクラスルームイングリッシュや会話例など、英語の先生としてではなく、英語の学習者として繰り返し触れることが重要であるように感じました。

この「繰り返し」の重要性について、西村先生は Levelt の発話産出モデルや第二言語習得理論に基づきご説明いただきました。村野井 (2006) にて示される言語習得のプロセスは、インプットから気づきを経験することでインテイクへと進むというものです。インプットへの気づきを促すためには、「こんな場面で使って、こんな意味かな？」のように意味が推測可能なものか、インプットを繰り返し扱っているものなのか、生徒の活用場面がたくさん設定されているかなど、いくつかの観点で指導を振り返ることができます。これらの観点から有用な指導と考えられるものとして、教科書の内容を繰り返す「5 ラウンドシステム」をご説明いただきました。

5 ラウンドシステムは言葉の学び、学習者が表現をスパイラルに活用できるか、生徒の実態や3年後の姿などに焦点を当て、各ラウンドで教科書を異なるアプローチで扱います。具体的には、1 ユニットの授業は2時間で行い、教科書のトピックを紹介する際のスモールトークを行い、リスニングは4つに分け(教科書扉のQA、ピクチャーオーダーリング、なりきりリスニング、

なりきりスピーキング)、平均で約10回、教科書本文に触れます。教科書の本文を単純に繰り返し聞くだけではなく、手を替え品を替え、生徒を飽きさせないような工夫がされています。音読も単なる繰り返しではなく、先生と一緒に音読したり、個人のペースで音読したり、音声CDと音読したり、空欄が設けられた音読シートを使ったりして、最後にリテリングとライティングが設けられています。このような順番はインプットが段々とアウトプットへと移行する過程を反映しています。まさに、理論と実践の一体化であると感じました。

特に印象的だったのはリンゴの画像を異なる角度から見せ、“What is this?” “An apple.” という会話を繰り返すものでした。下から見たリンゴは一体何なのか分からず、“What is this?” と声に出したくなりました。視覚的な変化を加えることで、学習者の興味を引きつけます。生徒が無味乾燥な繰り返しに従事するよりも、クイズ形式で内容を充実させ、手を替え品を替えて生徒を飽きさせない工夫は、生徒のことを普段からよく見ている先生にしかできないのだと改めて感じました。

西村先生の発表では5 ラウンドシステムの具体例や、その理論などを詳しく学ぶことができました。発表を聞く前は「中学校での指導にいきなり取り入れるのは難しそう」と感じている先生方もいらしたかもしれませんが、インプットの繰り返しを通してアウトプットへと繋げるという姿勢は明日からの授業に取り入れられるように思います。

最後に、年度末にもかかわらず、お時間を割いてくださった西村先生に心から感謝いたします。とても実りある内容はこれからの指導に役立つものであると感じております。

◇研究推進委員会報告◇

第23回 英語教育「なんでだろう？」座談会

日時：2024年3月17日（日）10:00～12:00

場所：神田外語学院7号館4階教室

テーマ「試してみよう！生成AI(ChatGPT等)
を活用した英語教育」

講師：研究推進委員会

白倉美里（東京学芸大学）

青田庄真（茨城大学）

報告者：伊藤泰子（神田外語大学）

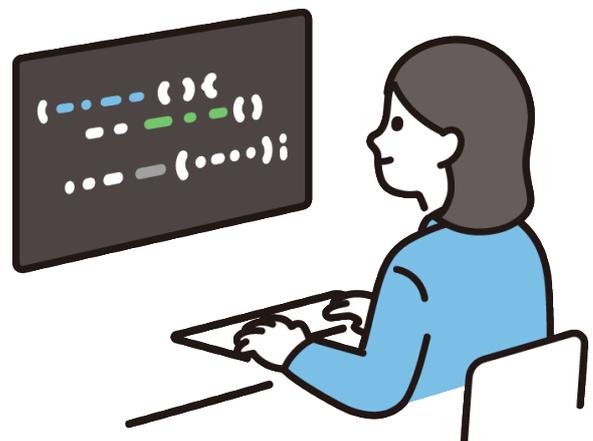
今回の座談会は実に5年ぶりに対面参加者を交えて、ハイブリッド形式で開催された。18名が対面参加で（うち9名が研究推進委員）、オンライン参加者は30名程度であった。

会は二部構成となっており、前半ではChatGPTの全般的な説明がなされた。ChatGPTとは何か、ChatGPTの得意・不得意なことやhallucination（人工知能が事実に基づかない情報を生成する現象）といった特徴が、例を交えながら説明された。例えば、「『ももえ』と言えよ？」という質問をしてみたところ、なかなかこちらのイメージする回答（山口百恵さん）がChatGPTから得られず、何度かやり取りしてみたがどうしても「山口百恵さん」が出てこなかったという。生成AIのこうした限界を踏まえながら、本題となる英語教育への活用方法がいくつか紹介された。ChatGPT以外の生成AIについてもその特徴が紹介され、文字情報だけでなく画像を生成できるAIを使って、絵や写真を描写する活動用の教材作成が可能であることについては、参加者は特に興味を示していた。また、他の生成AIを使って、学習指導要領など膨大な量のPDF資料の中で、「教えるべき単語数は何語か？」といった特定の情報を見つけることが可能であることも示された。必ずしも正しい情報が得られるとは限らないが、論文や書類を読むときの取っ掛かりとしては使えるだろうというヒントが与えられた。その

後、基本的な使い方や、うまく出力させるためのプロンプトの書き方などの説明がなされた。生成AIは大変便利なツールで、うまく活用して日々の指導に活かしていきたいところだが、ChatGPTでは他者が入力した情報が転用されていたり、事前学習データに著作物が含まれる危険性があったりするなど、注意すべき点があることにも触れられた。

後半ではChatGPTと「たわむれる」時間が設けられた。ChatGPTを初めて使う方のために、まずはアカウントを登録するところから始まった。講師が具体的なプロンプトの例を示した後、対面参加者はその場で実際に試して、質問があれば講師が対応した。オンライン参加者には「一緒にやってみよう」部屋と「質問」部屋の2つのブレイクアウトルームを設け、「一緒にやってみよう」部屋ではChatGPTの経験がある研究推進委員が3名の参加者と一緒にChatGPTを使ってみた。「質問」部屋では参加者からの個別の質問に講師が対応した。

会終了後のアンケートへの回答を見ると、「生成AIについてさらなる活用方法を知りたい」という声が複数見られ、このテーマへの関心が高いことがうかがえた。今後も研究推進委員会としてこうした現場の先生方の声に応えられるような活動をしていきたい。



関東甲信越英語教育学会日誌

(2024年1月～2024年6月)

- 2月18日(日) 第6回運営委員会(14:30～16:45, 明治大学中野キャンパス [ハイフレックス開催])
- 3月17日(日) 第23回英語教育「なんでだろう?」座談会(10:00～12:00, 神田外語学院 [ハイフレックス開催])
「試してみよう!生成AI(ChatGPT等)を活用した英語教育」
講師: 関東甲信越英語教育学会 研究推進委員会
白倉美里(東京学芸大学)・青田庄真(茨城大学)
- 3月23日(土) 春季研修会(9:50～15:50, オンライン開催)
1. 授業実践報告(小学校)
「様々な児童に対応した小学校英語の授業づくり」
瀧沢広人先生(岐阜大学)
2. 授業実践報告(中学校)
「生徒自らが使う英語の授業づくり」
西村秀之先生(玉川大学)
3. 授業実践報告(高等学校)
『生徒が安心して「ちょっと」挑戦してみたくなる授業環境作り—語彙指導からディベート, 自由英作文の評価まで—』
片居木純太先生(栄光学園中学高等学校)
4. 講演
「児童・生徒のやる気と自己効力感を高め, 自律的な態度を育む指導と評価」
泉恵美子先生(関西学院大学)
- 4月21日(日) 第1回運営委員会(14:30～16:45, 獨協大学 [ハイフレックス 開催])
- 6月8日(土) 第24回英語教育「なんでだろう?」座談会(15:00～17:00, 神田外語学院 [ハイフレックス開催])
「実践編!生成AI(ChatGPT等)を活用した英語教育: 授業と業務の効率化を目指して」
講師: 関東甲信越英語教育学会 研究推進委員会
青田庄真(茨城大学)・白倉美里(東京学芸大学)
- 6月23日(日) 第2回運営委員会(13:00～16:00, オンライン開催)

表紙写真「夏の風物詩」, p. 8「瀧沢広人先生の授業実践報告」, p. 9, 10「西村秀之先生の授業実践報告」, p. 11「片居木純太先生の授業実践報告」, p. 12「泉恵美子先生の講演」

編集後記

- ◆本号では2つの内容の特集いたしました。特集1では、役員の任期の変わり目に伴い、新役員や各種委員会の活動方針をご紹介させていただきました。特集2では、2023年度関東甲信越英語教育学会春季研修会の報告記事を掲載しました。研修会は引き続きZoomで行われ、英語学習者のやる気を引き出す方法について、登壇者の先生方からご講話をいただくとともに、参加者の皆さまを交えたやり取りが行われました。発表者の先生方にはご発表に加え、Newsletterの原稿執筆もご快諾いただき、誠にありがとうございました。
 - ◆また、研究推進委員会からは、「座談会」についての報告記事を寄稿していただき、誠にありがとうございました。今回の座談会はKATE初の試みとして、対面・Zoomを併用したハイフレックス方式で実施されました。当日の様子をぜひ本号の記事をご覧ください。
 - ◆2024年3月末日、取材活動や刊行物の制作にご尽力いただいた伊東賢先生、小野由香子さんがご退任されました。お二方には細かなところまで丁寧に作業していただきました。改めて感謝申し上げます。2024年4月からは新たに、青木重憲先生、福光将仁さんのお二方に編集委員として加わっていただきましたので、以下に自己紹介を述べさせていただきます。
 - ・本年度より、二度目の編集委員を務めさせていただくことになりました、青木重憲（千葉県芝浦工業大学柏中学高等学校）と申します。学会業務に携わる中で、会員の皆さまとともに英語教育への知見を深め、自らの教育活動にも反映できればと考えております。至らない点もありますが、どうぞよろしく願いいたします。
 - ・本年度より、編集委員を務めさせていただくことになりました、福光将仁（筑波大学大学院生）と申します。学会業務に携わることができることに感謝しつつ、会員の皆さまの役に立てるように尽力いたします。編集委員を務めさせていただくのは初めてですので、至らない点多々ありますが、どうぞよろしく願いいたします。
- ◆次号『KATE Newsletter』（2025年3月発行予定）は、「2024年度山梨研究大会」を特集する予定です。また、2022年度より、Newsletterのバックナンバーも学会ウェブサイト（<https://kate-jp.sakura.ne.jp/category/kate-newsletter/>）で公開しておりますので、そちらもぜひご覧ください。



2024年（令和6年）7月10日 No.120

発行者 関東甲信越英語教育学会 代表者 西垣知佳子（千葉大学）

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 臼倉美里

学会ホームページ <https://kate-jp.sakura.ne.jp/>

編集 関東甲信越英語教育学会編集委員会

[委員長] 森 好紳 (email: ymori@fc.hakuoh.ac.jp)

[副委員長] 田中菜採

[編集委員] 青木重憲 梶村祐志 神村幸蔵 小室竜也

佐々木大和 佐藤連理 鈴木健太郎 埴千賀子

福光将仁 細田雅也 水書 亮